

立命館大学の学びの仕組みとピア・サポート

大学での学びは、授業を基本としながら、「学びのコミュニティ」を大学の内外に広げていく営みです。これは、社会的な課題への認識の深まりと学び合う人間関係の広がりを意味します。その土台となる立命館の小集団教育とピア・サポート活動を発展させていきましょう。



文学部・応用人間科学研究科 教授 **春日井 敏之**

立命館大学で学ぶ意味と「学びのコミュニティ」

立命館学園で学ぶ意味について、2006年に定めた立命館憲章のなかでは、次のように述べられています。「その教育にあたっては、建学の精神と教学理念に基づき、『未来を信じ、未来に生きる』の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努める」。建学の精神とは、「自由と清新」であり、教学理念とは、「平和と民主主義」を指しています。つまり、批判的・創造的精神をもった学問研究の自由に基づき、平和、人権、貧困、環境、エネルギー、教育といった人類的な諸課題に対して、それぞれの学部、研究科における教育、研究を通して貢献していくことを、学園として明確にしてきたのです。こうした基本方針を具体化していくために、教育と研究の内容や仕組みの改革・改善について、大学の全構成員による議論が積み重ねられてきました。そのための協議の場を「全学協議会」といいます。全学協議会とは、大学という「学びのコミュニティ」を構成する学部学生、大学院生、教職員、大学常任理事会が、教育、研究、学生生活の諸条件の改革・改善に主体的に関わり、協議するために設置された機関です。2011年度には全学協議会が開催され、協議の結果が「全学協議会確認」としてまとめられています。2015年度は、その全学協議会開催の年となりましたが、議論が継続され2016年度に開催されました。

立命館大学には、全国各地から多様な能力と個性をもった学生が入学してきています。また、世界各国から意欲的な留学生も多く受け入れています。学生たちは、正課の学修・研究を中心としながら、サークル活動、ボランティア活動などの課外自主活動やインターンシップ、海外学習プログラムなどを通して多様な体験を重ねています。本学の学生自治組織である校友会が、新入生を対象に行っているアンケートによると、「大学でやりたいこと、望むことは何ですか」という問いに対して、2010年度に行った調査では、①高度な専門の学び(29%)、②幅広い教養の学び(17%)、③他の学生との学び合い(16%)、④自身の生き方・キャリア形成(13%)といった結果が出ています。学生たちが、総合大学の強みを生かした幅広い教養分野と深い専門分野の学びへの期待をもって入学したことがうかがえます。同時に、それが正課や課外も含めた教職員や友人との出会いと交流のなかで深まっていくことを期待し、自分の生き方につなげていくことを真剣に考えている姿も見えます。

他方では、学修への不適応、学力問題、友人関係の脆弱さなどから、学びの目的や意欲を失ったり、ひきこもってしまったりするケースも少なからず生まれています。経済状況が悪化するなかで、学費や生活費のためにアルバイトをせざるを得なくなり、生活リズムを崩しているような学生も見られます。本学では、このような状況のなかで、正課と課外を含んださまざまな「学びのコミュニティ」を通してお互いを

参考文献

- 立命館大学「2011年度立命館大学全学協議会確認文書」2012年 (<http://www.ritsumeai.ac.jp/rs/category/tokushu/110617/pdf.html/>)
- 中野武房・森川澄男・高野利雄・栗原慎二・菱田準子・春日井敏之(編)『ピア・サポート実践ガイドブッカーQ&Aによるピア・サポートプログラムのすべて』ほんの森出版 2008年
- 春日井敏之・西山久子・森川澄男・栗原慎二・高野利雄(編)『やってみよう!ピア・サポート』ほんの森出版 2011年

認め合い、「学び、かわり、わかち合う」関係のなかで個人と集団がともに成長していく仕組みをつくっていくことを重視してきました。「学習者中心の教育」を軸にして、ラーニング・commons(学習図書館・グループ学習の場)、スチューデント・commons(交流の居場所)、自習室(個別学習の場)を、全学と学部レベルで発展させていくための検討を重ね具体化を図っています。

■ 立命館大学の学生の強みと学びの展開

このような学生実態と「学びのコミュニティ」を生かした4年間(薬学部薬学科は6年間)の学びの展開を検討する際に、本学の学生の強みとして、次の3点をあげることができます。①4年間を通した小集団教育(基礎演習、実習・講読、演習など)を通して獲得する集団としての教育力と個の成長、②オリター(オリエンテーション・コーディネーター)、またはエンター(援助担当者)とよばれる学生スタッフなど、さまざまな学生のピア・サポート活動を通した相互の成長、③学生の課外活動への参加率の高さと、正課と課外の枠を超えて社会とつながるアクティブな学びによる実践力の獲得です。たとえば、学生部調査によれば、2016年度の学内のサークルなどに所属する課外活動への参加率は62.4%と高く、増加傾向にあります。これ以外にも、学外のサークル、NPOなどに所属し活動している学生も少なくありません。

多様な学生を受け入れているなかで、大学に入ってから伸びしろが大きい学生をどう育てていくかが、大学の社会的責任となっています。そのために、学生と教職員が全学的な議論を重ねながら、次の3点を大切にしていくことを確認してきました。1つには、初年次教育において高校から大学へのより主体的な学びへと「学びの転換」を図ること、2つには、小集団教育を軸に専門を深める4年間の「学びの展開」を図るための仕組みをつくること、3つには、自らの学びを「社会とつながる学び」として位置づけ、意味付けをしながら卒業研究や卒業後に生かしていくことです。卒業後の社会へのかかわり方を意識しながら、自らの学びの集大成として卒業研究、卒業論文、卒業制作等に取り組むことはたいへん重要です。「卒業研究(論文)」が必修とされているのは、現在は理系学部や文学部・映像学部・スポーツ健康科学部等ですが、それ以外の学部においても必修化、あるいはそれに代わる学びの達成度検証が可能なシステムの構築が検討されています。

しかし、大学に入学したばかりの新入生のみならずにとっては、学習の目的や将来のキャリア像も未確立であったり、また高校までの学習履歴と大学で要求される学力との関連も意識しにくいと、4年(6年)間を見通した学びをイメージすることには困難が伴います。そのために、たとえば、大学での学習の前提となる知識の修得に関して、高校の課程が未履修であればその回復・補習のためのリメディアル教育があり、学習の技術や方法について身につけるためにはアカデミック・ライティングをはじめとするアカデミック・リテラシーに関連する科目があります。さらに、大学での学びと社会とのつながりに関しては、教養科目のなかで、地域社会における活動体験を通じて学ぶ「サービラーニング」科目、自らの卒業後の生活と職業とを構想、体験する「キャリア教育」科目、「インターンシップ」科目等があり、総合大学としての強みを生かした学びや学び合いの場が展開されています。

また、さまざまな心身の障害や発達課題を持つひと学ぶことができるような施設や制度の充実も求められています。たとえば、2011年度には、大学における学習や人間関係などに困難を抱える学生支援のために「特別ニーズ学生支援室」が発足しました。多様な学生・院生や教職員が互いを理解し、必要なときに支援を行うことで、立命館大学という学びのコミュニティをより充実したものにしていく必要があります。なお2016年度からは、「特別ニーズ学生支援室」と後述する障害学生支援室が統合され、「障害学生支援室」として一体的な運営となりました。今後の課題として、発達課題をもつ学生へのピア・サポーターの養成が検討されています。

■ つながって生きる力とピア・サポート

私たちの心のなかには、家族や先生や友達など、周囲の人々の「お世話」になりながら育ってくるなか

で、「できることで、誰かを助けたい」「誰かのために役に立ちたい」といった人間としての素朴な願いが、育っていくのではないのでしょうか。つながって生きる力の大切さが指摘されていますが、具体的には、「誰かを助けること、誰かに助けってもらうこと、楽しいこと・やりたいことを誰かと一緒にすること」を通して、人はつながっていくのです。ここに、ピア・サポートの原点があるのではないのでしょうか。さらに、思春期・青年期は、受け身で誕生したいのちが、人生の主人公として主体的に社会とつながって生きようとするからこそ、「第二の誕生」と呼ばれています。「誰かを助けたい」「誰かのために役に立ちたい」といった気持ちは、「働くこと(職業選択)、愛すること(性と生)、社会参加すること(仕事以外)」という3つの課題の実現に向けた模索を通して具体化されていくのです。

ピア・サポートとは、仲間による支援活動を意味し、移民を多く受け入れているカナダで1970年代に、レイ・カー(Rey Carr)の指導で始まりました。その後、トレバー・コール(Trevor Cole)らによって、小中学校や高校におけるトレーニング・マニュアルが具体化され、広まっています。こうした実践は、アメリカ、オーストラリアなどの多文化社会で広まり、ヨーロッパやアジアにおいても取り組みが始まっています。その対象は、小中学校・高校の子どもたちだけではなく、大学生、地域、会社、高齢者、障害者など、さまざまな分野で活動が展開されています。なお、学校における具体的な取り組みとしては、ピア・サポーターの組織化、傾聴・コミュニケーション・問題解決・対立解消法などの支援スキルのトレーニング、具体的な援助計画、援助・相談活動の実施、ふりかえり(交流、評価)といった内容で実践が進められてきました。

トレバー・コールは、ピア・サポーターの役割については、次の例をあげています。「チューター(学習支援者)としてのピア・サポーター」「特別な友だちとしてのピア・サポーター」「立ち寄りセンターのピア・サポーター(特別な教室を利用)」「グループ・カウンセリングとピア・サポーター(スクールカウンセラーと一緒に)」「問題を解決する、対立を調停するピア・サポーター」「新入生のオリエンテーションとピア・サポーター」などです。ここからは、学校におけるピア・サポートの多様な可能性をうかがうことができます。

■ 立命館大学におけるピア・サポート活動

本学では、全学的に初年次教育の中心に「基礎演習・研究入門」という30名程度の小集団教育を位置づけています。ここでは、各クラスに2、3名配置され、新入生の「学習、学生生活、自治」を支援するオリター、エンターとよばれる2、3回生のピア・サポーターの果たす役割が大切になっています。また、授業を補助する大学院生のティーチング・アシスタント(TA)や上回生が自らの学びを踏まえて支援するエデュケーション・サポーター(ES)などのピア・サポーターには、後輩に学びの姿勢や方法を伝えていくことが期待されています。オリター、エンターの募集と研修は、12月～3月にかけて学部単位で行われ、合宿なども含めて5、6回の研修会を自治会とオリター・エンター団、学生部と学部の担当教職員が連携、協働しながら進めています。

2016年度は、新入生が約7,900名に対して、オリター、エンターは、自主的な応募によって約800名が登録されています。これは、新入生約10名に対して1名という高率であり、前年度の先輩によるピア・サポート活動を受けながら、次年度に立候補してくれるという学園文化が形成され、学生、教員、職員の努力によって定着してきています。この取り組みは、1992年より全学的に制度化されてきました。具体的なピア・サポート活動としては、4月のガイダンス期間の新入生クラス懇談会開催、履修相談、基礎演習への授業サポート、進路・学習相談、学生生活へのアドバイス、新入生歓迎祭典の企画、クラス交流会・合宿の企画、ゼミナール大会支援など、多様な支援を行っています。授業とは別に、自主的な運営に任されているサブゼミアワーが週1コマ設置されており、オリター、エンターも参加して、クラス交流、基礎演習における報告や新入生歓迎祭典企画の準備などに活用されています。また、毎年5月には、オリター・エンター団によってフレッシュマン・リーダーズ・キャンプという交流合宿が各学部で企画され、オリター、新入生、教員、職員が参加しています。2007年からは、実習を伴う新たな教養科目として

「ピア・サポート論」が全学を対象に開講されました。こうした取り組みが、支援スタッフの研修の場となるだけでなく、学園文化としてピア・サポート活動の裾野を広げることにつながっていくことを期待しています。

また、本学の障害学生支援室は、2006年に設置され、主として、視覚・聴覚・身体に障害をもつ学生を対象に、本人の要請に応じて、正課授業を受けるうえで必要な修学支援を学部事務室などとも連携を図りながら行ってきました。支援活動の中軸には、ピア・サポート、ピア・ラーニングを位置づけ、学生による学生への支援を行っていくことで、双方の成長を図っていくことを重視してきました。この理念は、「主役力(障害学生)」「主役力(サポートスタッフ学生)」「裏方力(障害学生支援室職員)」から構成された実践的な支援モデルに象徴的に示されています。とりわけ、サポートスタッフ学生の多様性を尊重しながら、経験を積んだ学生を学生コーディネーターとして位置づけ、サポートスタッフ学生どうしやサポートスタッフ学生と障害学生をつなげていく取り組みは、障害学生支援室の特徴的な到達点といえます。

2016年度は、サポートスタッフ学生は52名登録され、支援を受けている障害学生は13名います。ノートテイク、パソコンテイク、車椅子補助などの支援ケースに対しては、複数のサポート学生によりチーム支援の体制を組み、1名の学生コーディネーターが配置されていくのです。サポート学生に対する研修講座は、障害学生支援室職員と先輩サポートスタッフが協力し、その年に必要だと考えられる講座が開講されてきました。このように、障害学生支援室における取り組みは、双方の学生が、学習や大学生活において「主体と主体」として成長し、自分の人生の主人公になっていくことを支援の目的としています。(立命館大学障害学生支援室編『学生のチカラーピア・エデュケーションの視点でみる障害学生支援』2011年)。

最後に、オリター・エンター団の活動に絞って、ピア・サポーターとして成長していく姿と後輩へのメッセージを一部紹介しておきます。(立命館大学学生部・学友会編「立命館大学オリター・エンター活動—学生ピア・サポート組織活動紹介」2015年、2016年)

▶オリター・エンター 活動を通して得たこと

・新しいことへのチャレンジ精神—2014年度は、BKCで試行的に父母教育後援会の協力のもと、小集団クラス担当のオリター団員とそのクラスの新生生と一緒に100円朝食を食べるという企画を実施しました。この企画の目的は、新生生の親御さんの抱く学生一人ひとりの大学生活における健康管理の心配や正課、課外自主活動の向上に対する想いを知ってもらおうというものでした。新生生にこの想いは十分に伝わったと私は感じています。今後は、BKCだけではなく、3キャンパス全てで、このような取り組みを行ってほしいと思っています。(全学自治会・生命科学部)

▶これからオリター・エンターをする後輩へ

・大学時代で一番の思い出になっていることは、大学2回生から2年間続けたオリター活動です。主な活動内容は、週1回授業と一緒に受け論文作成のアドバイスをを行うことや、時期に合わせた1回生の不安を解消する企画を実施しました。現在は、医療機器メーカーの営業をしています。主に、手術で使用されるデバイスを取り扱っています。常に命と隣り合わせの仕事で緊張感がありますが、患者さんの体に本当に良いものを使用してもらう活動にはやりがいを感じています。外科医の先生は、使用するデバイスに全信頼を置いて手術を行います。そこで必要なのは、先生の感じている不安要素を「相手の立場になって」考えることです。オリター活動では、この「思考力」「共感力」「問題解決能力」が養われたと思います。これから大学生活を送る皆さんには、「人のためにアクションを起こしてみる経験」をしてほしいなと思います。オリター活動はまさに、自分も仲間も後輩も成長できる良い機会です。(経営学部)

◀考えてみよう

- ・あなたは、立命館の学生の強みや魅力は、どんなところにあると感じていますか。
- ・新生生のみなさんに対して、先輩がオリターとして支援してくれていますが、どんなことを相談したいですか。
- ・「社会とつながって自分を生きる」というのは、どんなふうに生きていくことでしょうか。